



1984-8  
No.191

【表紙】

おしらさま、ついたて  
解説は21ページ  
題字デザイン・桑山弥三郎  
カット・林美紀子

# もくじ

真の文化としての  
芸術教育を  
三善晃 4

●—(随想)—●  
文化活動と教育  
—中学校芸術鑑賞教室よ永遠なれ—  
山口重直 8

●—(報告)—●  
昭和59年度中学校芸術鑑賞教室に  
ついて 文化部芸術課 10  
公立文化会館運営状況調査結果の概要  
文化部文化普及課 14

我が県の文化行政  
水と緑と文化のまち広島  
—その実現をめざす文化行政—  
佐藤普門 18

文化庁ニュース  
昭和59年度  
国語問題研究協議会の開催 21  
昭和59年度国立美術館所蔵美術名品展  
長谷川 潔 展 22

●—(展覧会)—●  
近代陶芸の巨星  
河井寛次郎展 23  
今日のジュエリー  
世界の動向 24  
ウィーン美術史美術館展  
ハプスブルグ家収集の名品 25

地域文化活動紹介シリーズ⑮ 埼玉県加須市 28

国宝鑑賞シリーズ⑮26 国立劇場ニュース 31

# 真の文化としての 芸術教育を



戦後教育の成果

## 三 善 晃

(桐朋学園大学学長)

絶讃を博している。

以上は、音楽の専門学校以外の教育現場の成果である。音楽の専門学校からは現在、世界各地のコンクールの入賞者が多数出ているが、普通教育での音楽活動といい、若い音楽家の活動といい、共に一つの社会的文化環境の豊かさや高さの現れであろう。

### 成果の要因

第一に戦後の文教政策・教育行政がある。具体的にはまず(批判もあり、改訂も提言されているが)義務教育制度とその課程の基準としての学習指導要領(これは教科書の検定基準でもある)を挙げるべきであろう。これにより、ほとんどの中学卒業生が高校へ進む現在、六歳から十五歳までの児童・生徒たちは、どこにいても基本的には同一の教育プログラムに従って学ぶことが可能である。このことを文化論あるいは思想として否定しない疑問視することは可能だし、筆者もその可能性を留保しておきたい。が、例えば教科音楽に關して、身体表現(リトミックも)、歌唱(合唱も)、器楽(合奏も)、鑑賞(音楽史も)、理論(創作も)など、多岐にわたり、また相互に關連し合う諸単元を、小一から高三までの成長に応じて素材化し、配分し、系統だてて配置し、目標づけることなど、いかなる音楽

例えば昭和三十年代に來日した東西ヨーロッパの少年少女合唱団の音楽的レベルは、当時の日本の合唱教育のレベルからみれば、まさしく「天使の声」つまり雲の上のものだった。今日では彼らと互いの声を聴き合い聴かせ合う間柄にある。雲の上は地つづきになつたわけだ。特筆すべきは、このレベルの向上が一部の特殊例ではなく、全国の義務教育現場の一般現象であることであり、その平均的レベルでいえば、今日の日本の合唱教育は世界的に抜きん出ているのである。

再び昭和三十年代を振り返れば、当時プロ合唱団によって初演された多くの合唱曲は、今や普通高校の合唱団やお母さんグループの通常のレパートリーであり、しかもそれは初

教育のベテランにも手に余る仕事である。これが制度的に保証されたシステムとして完備し、全国的に共有されていることの効果は測り知れない。これをどのように用いるかは現場によりさまざまだが、このシステムによって全国の児童・生徒たちの音楽教科の体験が共通の基盤ごと高められていることは確かである。

第二の要素は、その公教育の基盤を支える地域社会の充実である。例えば合唱活動は小・中・高で育てられ、その地域社会の人間関係の中に根つき、維持され、発展する。一部は都市の大学に持ち込まれるが、この部分はほとんどが大学生どまりである。大都市は地方で創られた諸活動の舞台ではあり得ても、自前の活動を生んでいるわけではない。今や小都市あるいは都市圏外の町村といった地域性こそが教育の成果と結びつき、実質的な諸活動の母胎となっているのである。

これは第三の要因としての経済的安定とそれがもたらしたゆとりとに連動している。高度成長は止まったもの、状況は諸外国に比べてはるかに安定し、地方の環境は多角的に開発され、都市の兎小屋団地にも余暇と余技のゆとりがある。十数年前からピアノの生産量・輸出量は世界一位であり、まだ需要の限界ではない。その楽器産業が昭和三十年代に

### 教育の構造

始めた音楽教室の中には一産業で生徒八十方というところもある。音大を出たばかりの若い講師が出身地の教室で週に四十人の子供たちに電子オルガンやピアノを教えている、なども珍らしいことではない。昭和四十年代で、六〇パーセントの子供が何らかの形で鍵盤楽器を習っているという統計もある。

音楽教室の例は、産業界から見れば、その教育進出という第四の要因になる。子供から成人までを対象とする各種の教育は、新聞・放送などのマスメディアに先鞭をとられながら、地方自治体、私立学校、二次産業の大手などによる教養講座・サークル活動・実習教室として全国的に活況を呈している。経済的・時間的ゆとり(第三の要因)はその活用の機会と場をここで十分に与えられたことになる。そればかりではない。教育機器の開発もとどまるところを知らず、学校では教育のハウツウが新製品の活用いかにかかってくる。

第五の要因はメンタルなもので、以上の全体にかかわる。すなわち、日本人の特性として、ある目標を立てると、そのために効率のよいシステムを考案し、集中的に効果を挙げること能力を発揮する、という点である。教育もこの能力の対象であったことについて説明は不要であろう。

かくして、現在の日本の教育環境は図(六頁参照)のような構造として捉えられよう。

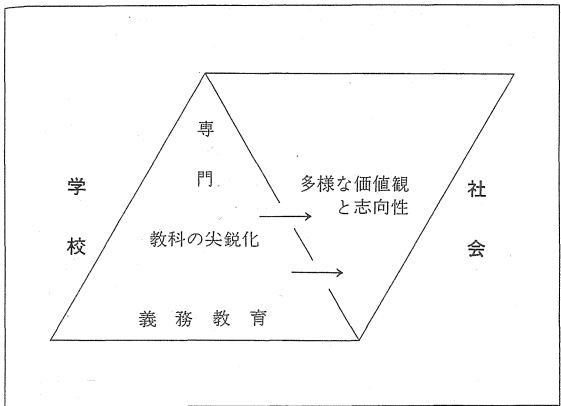
正・逆二つの三角形からなる平行四辺形である。正△は学校、逆△は社会、底辺は教育のスタート、上に向かって学習年齢が進んでゆく。正△はすべての児童の義務教育から始まり、専門課程(大学・院)へ進むに従って人数が少なくなることを図形化するとともに、一人の人間の学習する教科が減ってゆくことをも示している。専門のベクトルを高めるために、専門に關係ない教科への能力の拡散を避けるからであって、こうして一人の専門家が小学生時代に学んだ教科の大部分は現在の彼の専門性とは關わりがなくなる。小学校の教科内容は全国共通なのだから、あらゆる専門家に同じ事情が生じているわけであり、見方を変えれば一人の小学生は将来どのような専門家にもなれる教育を与えられていることになる。

そのような意味での正△、つまり先端が狭くなっていることが、逆△を意味づける。つまり、そこには上級学校に進むために選択の幅をせばめねばならないことにあきたらない人、それ以外の可能性を留保したい人、正△の機序に適合しない人など、モラトリアム志向を含めて多様な価値観と実践が求められ、

従って上辺（将来の生き方）は開いている。例えば大学の経済学部中退の演歌歌手、といった例がこちらでは実現するわけである。逆▽の下方には子供のための各種教室と塾、上方には成人のための各種学校はじめ個人や同志グループの開拓可能余地が組み込まれている。

### 見直し

以上を文化国家日本の教育の成果および可



い。今をよりの多目的ホールや美術館の建設にしても、そこに文化圏としての思想がみられる地域社会はわずかである。しかもそのような個性的社会の成立は県よりも郡、郡よりも町村とミニ化して、これは大都市の地域的人間社会が今や街角のミニ社会にしかないことと軌を一にする現象であり、構造の上部カテゴリーの虚構化空洞化が全国的に進行していると言わなければならない。

その逆▽内の教育のうち、教育テクノロジーに徹した体系としての塾は、機能的には正△の機構に組み込まれるべきであり、その意味では構造批判になっている。が、子供のための各種（芸術）教室は総じて第一成長期（ほぼ十歳まで）と第二成長期（ほぼ十五歳から）の間の時期（およそ中学学齢期）を臨界期とする「訓練」の方法論を持っていない。第一成長期は主として子供自身の成熟によって成果が挙がるものだから、教室は環境として機能すればよいと言える。しかし、その惰性で次の臨界期を過ごさせている教室には教育の展望も責任もないと言わざるを得ない。現に高校期にまで成長している教室生徒たちは訓練の臨界期を無為に過ごしてしまったために、第二成長期の成熟が期待できないのである。このことは当事者たちも遅まきながら気づいている筈だが、果たしてそれが根本的な見直

能性とするならば、今後は逆▽の成熟と、それに釣り合う正△の改変、そして両△の交流を期待し推し進めればよいこととなる。果たしてそれでよいかどうかを検討しよう。

まず指導要領である。芸術教科についてそれを見るならば、それは基本的には、芸術を要素論的に多元化することを前提としている。そこから多くの系統が設置され、系統毎に九年間の配分が構成される。従ってこれを指標とする授業は実際上、学習の連合説に依拠したものである。例えば共通教材（必修）の鑑賞曲を聴くとき、聴こえてくる楽音の中から特定の一楽器音のみが学習の対象とされる。これはその楽器音の学習がその学年に配分されているからにすぎない。かような聴き方が「鑑賞」であろうか。また例えば、曲想を感じながら歌うことは小一から求められているにもかかわらず、歌唱の強弱記号は小六で学習することとされている。つまり、歌ったり聴いたりすることの営みとしての全一的が教科上の配列・配分のために分断され、各系統は単線各駅停車的に、児童・生徒のリアリティとは無縁な（従って誤った）難易順でつながっているにすぎない。

しかもそれらを意味づけようとする「目標」は、総合・各学年ともにきわめて教条的かつしにつながつているか。見直すとすればそれは（グレード制など）進級概念そのものを見直しでなければならない。が、これは望むべくもないことである。何故ならこの概念は、教室側も親たちも依然として無意識に共有している家元制的感覚の所産だからである。そう考えれば、生徒たちが中学・高校への進学期になると簡単にこれらの教室をやめて塾通いに切りかえることも至極当然のことと思われる。その意味では、教室は一つの大きな風俗だということになる。そして、それが風俗であるならば、そこに親の意識の問題が浮かび上ってこよう。

例えば、学歴社会に反対しながら、それに乗り遅れまいとする意識である。それを含めて成人たちは、果たして自分自身に生じた経済的・時間的ゆとりを、主体的に、つまり流行や同化現象としてでなく、活かしているのだろうか。逆▽内の多様な活性は、果たして氾乱する情報の単なる複写現象ではないと言いつけるだろうか。

### 危機の認識

音楽に関していえば、昭和四十年代後半から世界の状況は根本的な変化をみた。一つは、ヨーロッパがヨーロッパ音楽の規範ではなくなったことである。これはヨーロッパ音楽の

観念的である。例えば総合目標のうちの「豊かな情操を養う」は、芸術情操教育という、いまだかつて誰も検証したことのない古い神話を一歩も出していない。かような要領を指標としての「全国的な基盤の向上」は果たして真の「豊かさ」を約束しているだろうか。

この要素論・連合主義的教育の多くの単元を中途半端なまま打ち切り、残した専攻を極めることにより出現する専門家とは一体なにか。これは体制や大組織の機能を高めるためにはきわめて有益な部品にすぎない。一人の脳外科医は、脳のある局所的部位についての最尖端の知識と技術を持つことによって専門家である。彼が患者の幸福や健康の意味をトータルな人間の視野の中で洞察することは、少なくとも彼への専門教育から求められたことではない。十八世紀の諸思想を学ばずにモーツァルトを弾く音楽家を作り上げている芸術教育も同じことである。

さて、それならば逆▽の方に展かれつつある教育に期待できようか。

地域社会が本当に充実しているならば、それは各地域がそれぞれ個有な歴史・伝承・エトスを含みながら一個の文化圏として成立し、それによって今日へのクリティクを表現するものであろう。そうやってはいないことは全国各地の駅前広場や〇〇銀座を見るまでもな

普遍性が現代世界で改めて成立したこともと言える。その形で、日本を含めた非ヨーロッパ圏の人間に、ヨーロッパ音楽を他者のものでない芸術として表現することが求められ始めたのである。ヨーロッパを規範としてそれに追いつき追い越せ式の教育は、もはや意味を持たない。

もう一つの変化は、芸術についての価値観の輪郭がなくなり、よかれ悪しかれテーゼ・アンチテーゼが成立しなくなったことである。言い換えれば、社会が芸術家を弁別できなくなったということであり、然るが故に、コンクールなどというイベントが急激に増えたと言える。

この二つの変化について認識するならば、日本の芸術（音楽）教育は、自分自身の言葉（表現）を持つ人間をどのように育てるかを命題としなければならない筈である。広く深い芸術言語という横軸に、個々の言葉という縦軸を定立させることを目指す教育、と言い換えてもよい。それは、ボタン一つであらゆるリズムを「演奏」する電気仕掛けの鍵盤楽器や打楽器を次々と開発したり、それを使いこなすことが音楽的体験であるとしたりすることとは関係ない。今、世界が求めているものから遠く、あるいは逆方向に、日本の芸術教育は滑りつづけてはいないか。

編集後記

○全国高等学校総合文化祭が七月三十一日から四日間、岐阜県で開かれました。全国の高校生がクラブ活動などを通して日頃研鑽を積んだ成果を披露するものです。この高文祭は高校野球、高校総体程には知られていませんが、本年度で八回目を迎え、夏の年中行事として定着しつつあります。また、中学校では、本年度から文化庁主催による芸術鑑賞教室が始まり、好評を博しています。

○感受性の強い、精神が柔軟な若い世代における芸術教育の大切さ、芸術文化活動の影響の大きさにについては、今月号で三善 山口両先生が指摘されているとおりです。文化行政の立場でも、この方面の施策を充実することが求められています。(H)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課  
TEL(0)三(二六八)二四一(代表)

「文化庁月報」八月号

(通巻第九一七号)  
昭和59年18月25日印刷・発行

編集 文化庁

〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号

発行所 株式会社 きょうせい

本社〒100東京都千代田区千代田4番12号

営業所〒100東京都千代田区西五軒町52番地

電話(0)三(二六八)二四一(代表)

振替口座 東京 九一六一番

印刷所 ㈱行政学会印刷所

定価 一八〇円(送料四五円)  
年間購読料 二、一六〇円(送料共)